５０年後の箱船（シェルター）のこどもたちへ

それは、昼の肖像だった。

「ねえ」

ざあざあと空気が照る草原を撫でるように滑空する。草が横たわったり跳ね返ったりするたびにチカチカと幾多もの光の粒が直接眼球を刺した。何度も何度も愛おしいひとのなまえがまっさらな空気にかっさらわれていく。

前をゆくひとが草原を踏みつけてニッコリとこちらを振り返った。汗の滲んだ額が夢のようにきらめく。まるで、わたしたちは五十年前のこどもたちのようだった。

◇

明けない夜はない。

そんな呑気なことは、とっくに全部雨に押し流されて海の藻屑となってしまって久しい。わたしが生まれ育ったのはそんな時代だ。過去の首都圏の巨大な雨水貯水層を再利用して作られたこの箱船（シェルター）には永久に太陽は昇らない。

人類は決して怠惰ではなかったが、誰しもが未曽有の大惨事の前では甚だしく無力であった。土砂降りの雨は度々都市部を踏みつけ、災害と復興を繰り返すうちに人々は少しずつ選択肢をもがれていった。最初の内は雨水貯水層の拡張といった従来的な解決法だけでなく、地上に大きなボウルを展開して空中湖を作るだとか、水を素早く原子分解しエネルギー利用するだとか、夢のある話も溢れていたけれど、苦し紛れの人類の展望を豪雨は無慈悲に、丁寧に、微塵にしていった。

豪雨災害の影響は海抜の低い地域や湿地だけでなく全ての国土を脅かした。雨水貯水層でも耐えきれないほどの雨量によって下水道の機能が失われたのである。清潔な飲み水の確保もままならない状況で衛生状態は刻一刻と悪化し病魔が猛威を振るう、下水道システムの壊滅は即ち生活の破綻を意味していた。

そして、最終的に人類は太陽と地を捨てて、地中に籠ることにしたのである。一時的非難を名目としたこの箱船に人類が逃げ込んでから２０年、まだ長い航海の終わりは暗雲に包まれたままだ。

２０５４年に産まれたわたしたち１５２人は大人たちに朝をもたらすことを期待されていた。わたしが物心ついたころにはもうすでに大人たちは自分が地上に舞い戻ることはきっぱり諦め、次世代であるわたしたち「箱船の世代」に遺伝子改変されていない「純粋な生

命」の種の保存と環境問題の改善をさせるための教育を徹底することに注力していた。わたしたちの生れながらの義務は大分すると二つである。一つは、排泄を通した有機資源の生成により地下都市共同体へ貢献すること。そして、純粋な生命の繁殖のための環境改善に尽力し地球へ奉仕することだ。わたしたち全員が、人口子宮機の中でまどろんでいたときからこうした役目を負っていた。

つまり、わたしたちは選ばれたこどもたちだった。

わたしたちは、きっと、どの時代のどんなに裕福な子どもたちより幸福なこどもたちだっただろう。全員が平等に知恵と手間を費やされていた。わたしたちはみんな同じだった。使命と運命すらも共有したきょうだいだった。

わたしたちは既に選択されたこどもたちだった。

それは人肌のように柔らかく暖かくて、押しつぶされそうな程に重かった。

まあ、別に現実がどうにもならなかったことに、特段わたしは恨みを感じてはいない。むしろ人類は上手く逃げた方なのだろうと称えてさえいる。きっと、わたしたちの現在は最善なのだ。だって大人がいるし、共同体が機能してるし、かぞくがいる。少なくともわたしたちは生まれた時から暖かい所にいた。それが、計り知れない程の祝福と努力でなければ一体何なのだというのだろうか。

わたしは、誰かが一緒に泣いてくれるのならばずっと真夜中でも良かった。

◇

すべての人々が液状であればいいのに、と思ったことはないだろうか。

まず、わたしたちは完全なる液体になる。そして、混ざりあって完全に一つのものになる。きっとそれはすばらしいことでしょう？　すべての喜びと痛みは共有され均質化される。誰も一人で悲しみにくれたり病的に喜びを貪ることもないのだ。そういうものを幸せと呼ばないというのなら、本当の幸せなんてものはきっとちっぽけでつまらないものであるに違いない。

わたしが好きな２０２０年代の作品には度々三大欲求という概念が引用される。食欲に睡眠欲、あと最も大袈裟に取り扱われる性欲のことを指す。わたしが思うに、結局２０年代の人々が性交渉を何よりも重視したのは、無論人口子宮が開発されていなかったからというのもあるだろうが、何より他者と何かを分かち合いたいという欲求が半世紀前の人々にだって強く備わっていたという証拠なのではないだろうか。

わたしは誰しもと一緒になりたい。

わたしの三大欲求は一緒に生きたい、一緒に死にたい、そして残る一番大きな望みは全てのひとと完全に同化してしまうことなのだ。

だからわたしは、全力をもって社会全体の秩序を守り、そしてその割にはすぐさま集団圧力に負けて悪趣味なことをする、いわゆる中身のない偽善者でいることが一番心地よいの

である。
　人生で五千回目の自他同一の素晴らしさについての講義がわたしの脳内で着々と進められているとき、時刻は正午だった。教授のわたしは、いつも照明が節電されてるせいで異様に薄暗いｇ塔の廊下を歩きながら滔々と心に語りかける。傍聴している生徒はわたしただ一人、しかもコンタクト・フォンを瞳孔でぐりぐりと操作している。生徒のわたしは頭の片隅だけで器用に学習しているつもりになりながらチャットルームをチェックする。お馴染みのルームに入ると、やはりお馴染みのメンツが集まっていた。
　お決まりの入室の挨拶をするわたしのアバターの方に猫耳をピコピコさせながら『でいじー♡』が駆け寄ってくる。
　『ねぇねぇ、好きな人っている？』
　『でいじー♡』が大きな鈴をちりんとならせてニンマリと笑う。「本気じゃないですよ、冗談で言ってるんですよ」という配慮の意思表示である。
　無論このチャットルームにいる三人全員が、冗談でも本人の了解を得ない上での三者への好意の表明が現在の社会道徳から大きく外れた行為だとはわかってはいたが、敢えてそれを指摘しなかった。半世紀前の倫理観で構成されたコンテンツを愛好するわたしたちにとって、自身の社会性とエンタメ欲求をすり合わせるためにこうした非道徳的なジョークを交わすことが時たま必要だった。倫理的批評を突き詰めることも必要なことだが、それだけでは本当にうんざりしてしまう、こんなにも面白いのにどうしても非道徳的なコンテンツに、こんなにも非道徳的なものを楽しんでしまう自分に。だから時々わたしたちはコンテンツの「非道徳的」をジョークとして嘲笑うことで、明るくエンタメを消費しながら現代の倫理感を称賛していかなければならなかった。２０年代のコミックカルチャーだけに限らず、あらゆる古いコンテンツを愛してしまったものたちが背負わざるを得ない性である。というかそもそも共同体維持と地球環境改善のために学ぶべきことが山積みであるこどもたちが娯楽に現を抜かすこと自体よろしくはないのだ。常にわたしたちは耳当たりの良いエクスキューズに飢えていた。
　『なるほど、恋バナってやつだね』
　『Tik-5』がくいッとメガネを上げる。眼科医療が発展した今日日では、こういった２０年代カルチャー愛好家が集うヴァーチャルチャットルームかアニメーションアーカイブくらいでしかお目にかかれないモーションだ。
　『そぉ〜、やってみたかったの！』
　『でいじー♡』が愛らしく身をくねらせると、大きな鈴の刻むリズムに合わせてふわふわしたフリルスカートとしっぽが揺れた。さすが『でいじー♡』アバターモーションのクォリティーが高い。本人もわたしたちも敢えて言及することはなかったが、ちょっとしたふるまいやアバターのクォリティーから『でいじー♡』がわたしたち二人よりも頭一つとびぬけて優秀でスコアが高いことは明らかだった。
　『僕は好きなキャラとかあんまり作らないタイプなんだけど』

『だから〜、恋バナだって！　「ヒト」じゃなきゃだめでしょ！　「推し語り」とは別なのっ！』
シャーっと『でいじー♡』は『tik-5』に威嚇する。
『ね〜、つねちゃんはいないの？』
語り掛けられ、わたしは素早く視線でキーボードをタップし、メッセージを送る。もちろんアバター動作の入力も忘れない。排泄物の質や勉強の成績は並みだが、コンタクト・フォンの操作では誰にも負ける気がしなかった。
『佐々木五番とか結構イイじゃん』
なけなしのポイントをはたいて作ったわたしの学ランを着たアバターはスマホで恥ずかし気に口許を隠しながらぼそぼそとしゃべる。計算通りにカワイイ。学内の廊下を歩きながら入力したにしては上出来ではないか。
『えーっ！　えーっ！　いいじゃん、いいじゃん、告っちゃいなよ〜！！』
『でいじー♡』が両手でふんわりと紅潮した頬を隠しながらピョンピョン跳ねた。
階級主義の象徴として消し去られたメイド服と制服、眼科医療の発展のせいで生産されなくなったメガネ、それにコンタクトレンズ程の大きさで角膜の上から装着し瞳孔の動きだけで操作できるコンタクト・フォンが開発されたため市場から消えて行ったスマートフォン、そして極めつけは現実恋愛。わたしたちはとことん「要らなくなった」ものを愛していた。故にスコアで得たポイントの殆どを日用品以外のアーカイブ視聴権限のために費やしていた。
そこまでは同じだけれども、二人はファンタジーとして、非現実への接続点としてそれらを愛している。わたしとは真逆だ。わたしは半世紀前の人々とわたしたちとの共通点を無理やりにでも見出すことにとり付かれていた。どれだけ状況が異なっても、結局は人間は同質の存在であることを確認するごとに、わたしの同化欲求は少し満たされ更に飢えていった。おそらくわたしたち三人は根本的な面で違っていたし、一般的な交友関係の域を出ずに現実での接触も皆無だったが、紛れもなく長きにわたって同じ時間を共有してきた親友だった。
『ヴァーチャル上のネームじゃなくて社会的地位の付与された氏名を言うのはさすがに露悪的すぎるのでは？』
盛り上がるわたしたちとの対比のように『tik-5』は肩をすくめてため息をついた。
わたしはぎくりとしながら、落ち着いて、さも平生であるかのようにチャットを入力する。ここで本心がバレて、貴重な同好の士を失うわけにはいかない。
『そういう批判なんだよ。２０年代のコンテンツにありがちな階級至上主義への批判としてのブラックジョークじゃないか。うん、でもたしかにティックを不愉快にさせてしまったのだし、反省するよ。笑えなきゃジョークじゃない』
真っ赤な嘘である。わたしは本当に佐々木五番が好きだった。佐々木五番は、私の太陽だった。

太陽に出会う前、わたしがこの安全な揺籃の中で感じていたのは紛れもない恐怖と孤独だった。

この地下都市で、産まれた時からわたしは「わたしたち」であり、わたしたちは「わたし」であった。だってわたしたちは、みんな同じ過去と運命を共有した選ばれた存在なのだから、大人に選ばれたこどもたちなのだから。なのにわたしはどうもがいても個体なのだ、一人っきりなのだ。そんな当然のことがひどく苦しかった。なぜ一緒になれないのだろうか。どうしてこんなにも運命を同じくしたひとたちに囲まれているのに、自身の運命には一人っきりで戦わねばならないのだろうか。誰もが独りぼっちの世界に産まれたことをどうやって受け止めろというのだろうか。孤独を慰めようとコミュニケーションを重ねるほどに孤独は反って如実になる。一心同体のきょうだいたちとわたしは、なぜ、別たれているのか。なぜ、決定的に別たれているのだと自分は疑いようもなく確信してしまうのか。このような問いの前で、わたしは「わたしたち」ではなかった。どうしようもなく独りぼっちで、悲鳴の上げ方も解らないまま恐怖にのたうちまわっていた。わたしが太陽を見る日が来ても、きっとこの夜は永遠に明けないだろう。そういう諦念が心臓の裏にこびりついてきた時だった。

今年、2070 年に、私は太陽と出会った。

わたしの太陽は突如として昇り、わたしを無差別に微笑みかけるように照らしたのである。

太陽は人間の形をしていて、佐々木五番という氏名で学校に通っていた。

あのとき出会った十五才の佐々木五番だけがわたしの痛みを知っていた。佐々木五番だけがわたしと同じ痛みを抱えて泣いていた。孤高に佇む佐々木五番を一目見て、わたしは何故だか急にそんな気がして、歓喜で吐きそうになりながら心の中で佐々木五番を何度も何度も抱きしめた。このひとがわたしの探していたひとだったんだ、一緒になろう、一緒になろう。けれども佐々木五番は夢想の中でもわたしを抱き返さなかった。一目ぼれで、初恋で、強烈な片想いだった。

勿論わたしとしても相手の社会的地位を知った上での現実恋愛の倫理的問題については十分承知している。わたしは何時からこんなにも階級主義的になってしまったのだろうかと、わたし自身随分思い悩んだ。わたしは 20 年代カルチャーを愛好しているが、過去のルッキズムと階級差別的現実恋愛には批判的であったはずだ。ああ、せめて恋ではなく信仰であってほしいと、そう願ってしまう時点でどうしようもなく恋だったのだろう。気づけばわたしは受け止めることしかできないところに到着していた。

かといって２０年代アニメよろしく佐々木五番に勇気を振り絞って話しかけるだとか、そういったアプローチをするわけではなかった。冗談交じりにクローズチャットで表明するのが限界である。わたしは比較的倫理と常識を重んじる傾向があるこどもなのだ。ヴァーチャル上ではなく社会的地位がお互い明らかな状態で事務用事以外で話し掛け友好関係をもとうなどと企てるハラスメント的な行動を易々と実行するなどありえないだろう。密かに情を抱きながら自発的に関わり合うことなく遠目ですれ違う姿だけを胸に大切に収める

というのがわたしが佐々木五番に捧げられる唯一の誠意であり愛情だ。手を握ってほしいとか、氏名だけでなく「なまえ」を教えてくれたらとか、最少共同体申請に同意してもらって「かぞく」になってほしいとか、そういうことを……まあ、妄想するのは仕方ないことだが、実行に移したいなどという加害的欲求に変換してしまってはいけないのだ、決して。そして、階級主義者的な嗜好を持っていることを友人に気取られるのもベターではない。

『いや、僕はそもそも倫理的にマズいものをネタとして消費してしまうことから忌避しているのだけれど……２０年代の階級主義とハラスメント型性愛嗜好は、カルチャーを愛している僕たちだからこそ真剣に批判するべきだ。それが最低限の、現代の社会構成員としてとるべき態度だと思う』

『まぁまぁ、てぃ〜ちゃん文化の実践が批評においては重要とかなんとか言ってたじゃん。これも文化の実践的な？なんとかでしょ、多分』

『多分……？』

『Tik-5』の眉間に皺が寄りメガネが鋭く光った。

『絶対！　絶対にゃ！』

『そうだよ！　実践実践！』

「冗談」を貫き通すために、あえてお道化てわたしも『でいじー♡』に加勢すると、『tik-5』はゆくっりとため息を吐き腕を組む。このポーズがプライドの高い『tik-5』なりの降参のポーズだった。

『えー、だけど、佐々木さんってえ悪い噂しか聞かないけどなー。やめときなよー』

『Tik-5』はらしくもなく典型的な「ぶりっこ」の仕草で「台詞」を棒読みする。もちろんわたしと『でいじー♡』は笑い転げた。『tik-5』はふっきれると意外にノリが良いやつなのだ。

『な、何、その悪い噂って』

『でいじー♡』がにゃははは と笑い悶えながら訪ねると、『tik-5』は淡白に『し尿バイト』と呟くので、わたしは終に腹を抱えて笑うアバター動作を入力する。これはわたしにとっての「まいった」だった。

『全っ然２０年代っぽくねぇ〜！』

２０年代においてし尿はあくまでも汚物である。今でこそ消化機能が健康なわたしたちのし尿は貴重な有機資源かつ人類の共有財産であるとして大事に大事に利用されており、個人が個人および機関に対してし尿を私的利用または物々交換の対象とする、いわゆる「し尿バイト」は固く禁じられているが、２０年代にはきっと理解されない慣習であろう。わたしたちは度々２０年代のルッキズムと階級主義に眉を顰めるが、逆に糞尿を尊ぶわたしたちの社会的態度も２０年代の人たちにとってはとても理解できないことなのかもしれないと思うとなんだかほっとするのは何故だろうか。常識というものの脆さをつまびらかにして現代の社会規範に反した想いに飲み込まれつつある自分を正当化したいからなのか、それとも人類の適応力に希望を抱いているのだろうか。どちらにせよわたしのちっぽけな虚

しさは変わらない気がして深く考えるのは止めた。
『でもぉ、ほんとうにそういう噂あるよね〜佐々木さんがし尿バイトしてるんじゃないかっていう』
「えっ」
『でいじー♡』のつぶやきに、驚いて肉声が出てしまった。どう考えても冗談だろうに、やはり佐々木五番の関係する話題ではどうも高次脳が正常に機能しない気がする。
『今の時代に学内の噂とかあるのか、令和じゃあるまいし』
『偶然佐々木さんが管理員に囲まれてるところ見ちゃって、何か不正をしたんじゃないかーって聞かれてたよ〜』
管理員の直接聴取だって？
わたしは失望よりも漠然とした怒りと焦りに飲まれていた。わたしの中で、佐々木五番はどれだけのことをしたって気高くあることを許されるはずの存在だった。それが不当に揺るがされている気がしてならなかったのだ。ありもしない悪意に怯えていた。
『ああ、それなら僕もされたよ。文化的実践のためにコンタクト・フォンを家に置いて一時間くらい散歩してたら管理員に事前通告なしで聴取された』
『何やってんのてぃ〜ちゃん！』
『良く考えてもみ給えよ。２０年代の創作者たちはコンタクト・フォンがない状態で生活し、物語を創作してきたんだ。２０年代の創作の批評のためには、そういった当時の実感を伴う世界観を観察することが重要だとは思わないかい』
『つまりさあ、てぃ〜ちゃん程のオタクじゃなきゃコンタクト・フォンなしで長時間活動するなんて疚しいことがあるって証拠じゃん、どっちにしろだにゃあ』
『うーん確かに、学校の近くまで監視機が設置され始めてるって報道が最近あったことも鑑みると意外と犯人は身近にいたりするのだろうか』
身をすくませながら、沈黙を怪しまれないようにチャットを打つ。
『犯人って、それこそ令和じゃないんだし』
『昔ならともかく１５００人規模の箱船じゃあねぇ〜違反予測AIもあるからだいたい実行前にカウンセリングされるから、そもそも犯罪なんて起こりようもないけどお、でも本当にし尿バイトしてるなら、それって共有財産の損失に加担したってことだし、こどもでも「犯人」みたいに隔離されたりするのかにゃあ？　まあ、こんなこと話したって楽しくもないし〜他のお話しよおよ〜』
共有財産の損失に加担。隔離。それぞれのワードが頭の中で歪に反響し合う。くらくらしながらルームの音声を下げた。
「あ……」
コツコツと廊下に等間隔の足音が聞こえる。現実の、足音だ。チャットやネットサーフィンもせずにただまっすぐに前を見つめて進んでいくその姿は佐々木五番その人だった。
何故ここにいるのか。

わたしは今、ｇ塔にいるが、佐々木五番はたいてい月曜の四限と五限の間は照明が一番明るいｃ塔の大きな窓のすぐそばの席に着席して、この真っすぐな視線をじっとボードに打ち付けているはずだった。

――疚しいことがあるって証拠じゃん――

わたしは立ち止まってじっとすぐ前に迫った佐々木五番を見つめる。佐々木五番は一切頓着せずにただ真っすぐに進んでいく。そのさまは何か「目的」があるかのようだった。

わたしは気づいたときにはルームを退室し駈け出していた。ありふれた退室の言い訳を用意する余裕はあったが、それ以外の未来に対する心構えは皆無に等しかった。思考が完結しないままに行動し、肉声を張り上げる。「待って！」。待って、沈まないで欲しい。こんな馬鹿々々しいところで、こんなあっけないことで、太陽が沈んで良いと、佐々木五番は思うのですか？　ミュージカルのように美しくそう怒鳴り散らせればどんなにいいだろう。しかしわたしは一般的なこどもと同じように、プレゼンテーションや協同ワークはできても、私的な感情表現はヴァーチャル上でしかなかなかしようとは思わない性質なのだ。とにもかくにも思考と舌がもつれあってがんじがらめにされていた。

「なんでしょうか、わたしに何か要件が？」

ゆっくりと佐々木五番は問いかける。瑞々しい瞬きには品定めをするような色が滲んでいた。この時点で通報ではなく困惑で済ませてくれるのはなかなか稀有なことだろう。それともやはり佐々木五番には管理局を頼るわけにはいかない事情があるのか？　だとしたら、わたしはなんとしてでも阻止しなくてはならない。「あの……」。なんとか、そう、とにかくなんとかするのだ。何でもいいから、なにか、阻止できそうなことを言ったりしたりしなければ。

わたしは勇気を振り絞って叫んだ。ここで行動しなければ何もかもが終わってしまう。

「こっこここここ、これからは一生わたしと一緒にトイレにいってください！」

「なんで？」

なんででしょうね。佐々木五番の反応は言ったそばから自分の発言に羞恥し悶えるわたしの乱れた思考を非常に端的に表したものでしかなく、質問されても共感する以外わたしにはできやしない。だが、素直にそうしたところで、佐々木五番はわたしを捨て置いてスタスタと目的の場所へと身を沈めていくのみである。わたしには返答の義務が生じていた、他ならぬわたし自身の歪んだ想像力によって。

「好きだから……」

苦し紛れに答えると、佐々木五番はぎゃはははと豪快に笑い声をあげた。

わたしの狂気じみた態度に笑っているのか、矛盾しかない言動に笑っているのか、この複雑な事故のようなシチュエーション自体に面白味を感じているのか。ただ一つ、わたしに残された残り少ない名誉のために一生涯詮索しないでおくのがきっと賢い生き方であることだけは明らかだ。

わたしが傷心を癒すためにコンタクト・フォンで２０年代のお気に入りのイラストフォ

ルダをぼんやりと眺めていると、何かが服越しに腕にあたる。実写ウィンドウをメイン表示にすると、佐々木五番がわたしの腕をつかんでいた。
「じゃ、行こうよ」
いきなり佐々木五番は、まるでチャットの常連どうしような気軽な口調で語りだした。
「えっ？」
「今から行こうと思ってたんだよね、一緒に来なよ……えっと、山田一番だよね？」
まあ２０年代生まれだったら「どうしてわたしの氏名を……？」とひとしきり勘違いすることができただろうが、わたしは所詮箱船世代である。こどもは１５２人しかいないし全員同い年で教育課程も同じだから、現実のコミュニケーションが疎かになろうと自ずとみんな互いを記憶していた。
「あっは、はい、え、あの、でもその」
願ったり叶ったりではあるが、その、現実での身体接触と肉声会話ってつまり、「そういう仲」って捉えられるのだが、良いのか？　いや、さすがに、これは、こういうのはせめてカップルルーム制作して三か月くらい互いに親交を深めてからやるべきだと思う。
戸惑うわたしに、窮鼠を慈しむ猫のように佐々木五番は優しく微笑む。
「あのさ、自分がどういう行いをしたか解ってるのかな？」
佐々木五番はすっと自分のコンタクト・フォンを指さす。わたしのハラスメント的行為は既に佐々木五番のコンタクト・フォンに記録されている。
「黙って言うこと聞けよ」佐々木五番は無邪気に柔らかな頬にえくぼを刻んだ。
やっぱり、太陽というものは、どんなことをしていたって燃えるように美しいものなのだな。
脅迫行為を前にして場違いな感動があたり一面に咲いていた。何もかもがめちゃくちゃだ。わたしはもう正気ではないのかもしれない。通告されるべきは、隔離されるべきは、もしかしたら、わたしなのかもしれない、と、湯だった皮質が嘆いていた。

◇

放課後、わたしは家に帰るとさっそく自室に籠り、すっぽり頭部を覆い隠せるヘッドセットを被った。いつものように映画観賞には没入感が必要だとかなんとか長ったらしい言説を並べ立てていた『tik-5』に影響されてポイントと交換したものだった。結局コンタクト・フォンで済むものをいちいち引っ張り出して使うのももどかしくて今の今までボックスの出しにくい位置に収納されていたが、とうとう本領を発揮させてやるときがきたのである。まさしく全ての物事がこのときのために完璧に配置されていた。
わたしは二人だけのクローズドチャットに入室すると、じっと佐々木五番を待った。

まるでコミックのような出来事だが、昨日わたしは本当にあのまま佐々木五番に腕を掴

まれトイレに引きずりこまれた。わたしはトイレの一番手前の個室に入れられ、そして佐々木五番はわたしの真隣の個室に入った。もしかしたら、佐々木五番がわたしと同じ個室に入り込んで、目の前で排便するところを見せたり、艶やかでずっしりとした糞尿を流す前に妖艶に見せつけてくるのではとドギマギとしていたわたしは、ホッとしたような、がっかりとしたような、アンビバレントな弛緩にへろへろと便座に座り込んだ。一部の、というか大概の大人からは忌避されている事実だが、こどもたちの間で主流な創作物投稿用プラットフォームでは、もっぱら人気なコンテンツではだいたい定期的に質と量が良好な糞尿を生産できるという描写や付近で丁寧に肛門を拭く描写が挿入されているのが魅力的なキャラクターであることの前提条件であった。たしかに階級主義一歩手前の描写で少し危ういところもあるから批判する意図は十二分にわかるのだが、よりにもよって大人はこうした描写をスカトロジーと同一視し批判しているのだ。あり得ない、不衛生嗜好だなんて！　わたしはこのトピックを見て初めて２０年代風の「思春期」による大人への反抗心というものに共感し、そのおかげか心なしか青春モノに対する解像度が上がった気がする。やはり文化的実践については『tik-5』の個人的研究の有意義さを認めなければならないだろう。

古典好きのわたしであってもやはり同世代の創作の余波を受けているし、それになんだってあの佐々木五番がすることなのだ。きっと２０年代のこどもたちだって好きな人のあらゆる面を見たいと思うだろう。素晴らしいところも卑しいところも恋しいのだ。わたしは、ハイスコアのように見えて実はし尿の質が悪くったって佐々木五番を嫌いになれる気がしなかった。

コツコツとドアがノックされ、個室をでると佐々木五番が待っていた。し尿を持ち帰れそうな容器は身に着けていなかった。

「もう、流したんですか？」といいながらわたしは佐々木五番が入っていた個室を覗き見る。し尿を横流しできるような仕掛けはされていないようだった。

「見せて欲しかったの？」

「わっ、近い！」

あろうことに佐々木五番は身体を密着させるようにしてわたしの側に立っていた。わたしがコンタクト・フォンで個室の精密観察をしているうちに忍び寄ったのだろう。

「あはは、照れないでよ、今度からは見せてあげようかなと思っただけなのにな」

「いや、照れてるんじゃなくて……トイレには監視機が設置されてるんですよ、パートナー申請なしでのこの身体密度でコミュニケーション取ったら佐々木五番が通告されるかもしれないでしょ」

「わたしの、見たくないんだ」

「いや、それは……」

「ほら、違わないんだろ」

言外に「悪さをしても通告されるだけで得なんてない」と諭したつもりが、すっかりイニシアチブを佐々木五番に奪われる。

首を傾げてニヤリと佐々木五番が笑う。長い髪の毛が笑みに繊細な斜線を引いていた。
「あとさあ、パートナー申請もしようよ、もうわたしたち友達だろ」
唐突な宣言にわたしが口籠るのを頓着せず。佐々木五番はすたすたと手洗い場に向かった。
どこからどこまでコミックのような話だが、本当に２０年代のコミックならば手を洗うときは蛇口を一ひねりし水をジャブジャブと浪費したことだろう。しかしこれは現実だ。マイクロプラスチックの海と汚染された雨水に囲まれた地中では清潔な水は極めて貴重である。そのため衛生状況を良好に保ちながらも水を節制するために造られた箱船の手洗い場では水ではなく風で汚れを取り除く。佐々木五番は手洗い場の送風機に手を入れ無駄な有機物を落とし、さっとアルコールで除菌する片手間に、からかうように口走った。
「パートナー申請するには、確か最低一回はクローズチャットで申請者どうしのコミュニケーションを最低一時間はとらなきゃいけなんだっけ？　コード教えてよ、明日チャットしてその日に申請しよ」
「山田一番も手洗いなよ」と佐々木五番はぐいっとわたしの腕を掴んで。送風機の間につっこんだ。除菌が終わっても、佐々木五番はわたしの手を離さなかった。
「あの、理由というか、佐々木五番の意図がわかりません……」
困惑するわたしに、佐々木五番は今にも歌いだしそうなほど上機嫌に答えた。
「わたしね、山田一番の変でおかしくて意味わかんなくてすっごく気持ち悪い所、大好きになれるかもしれないんだ。明日絶対に来てよ、嫌いにさせないで」
当然のように、わたしは再び佐々木五番に服従した。だって嫌いにならないで欲しかったし、それにし尿バイトの監視もできるし、逆にどういう思考を経れば断るという選択に行きつくのか聞いてみたくらいだ。

「あ」
やっと佐々木五番らしきアバターが入室してきた。慌てて文字を打つ。
『少し遅かったね』
『あはは、なんで現実で知り合ってんのにロイド音声使うんだよ。いちいち入力するのめんどくさくない？』
カイコをモチーフにしたアバターは無挙動のまま、佐々木五番の肉声が届けられる。スコアが高い佐々木五番ならもっとキャラメイクやモーションに手間をかけられるだろうに、カイコには口パクツールさえ適応されていなかった。ただ、じっと静止し、わたしの方を深淵めいた複眼でみつめている。
『こっちの方が慣れてるんだよ』
『うわ、山田一番って入力速いな……それよりも何このアバター、モーションまで無駄に凝ってるくせにモデリング雑過ぎない？　絶対普段使いしてないやつでしょ。いつも使ってるやつも見せて』

佐々木五番はチャットでもリアルの氏名で呼び合うらしい。少し驚きながらも、まあ、佐々木五番のやることだしなと納得している自分もいた。佐々木五番は、悪知恵が働くわりに本質的に真っ直ぐすぎるところがあるから。

『いや、これと趣味用のやつしかないから……』

『あのさあ、これから一応パートナー申請してゆくゆくは最少共同体申請もして人生を共有し合う仲なのに趣味くらい恥ずかしがるなよ』

『ははは……かぞくになるのを前提にってやつですか』

臓物が暴れだしそうになるのを必死におさえながら、わたしは嘯くように茶化した。人間にとっての最大の屈辱とは相手の冗談にいとも簡単に振り回されていることを悟られてしまうことである。歯を食いしばり静かに一度退室し、仕方なくいつもの学ランのアバターで入室しなおす。

佐々木五番は意外だったのかわたしのアバターを見るや否や『おお』と感嘆の声を上げた。

『へぇ、結構露悪趣味なんだ』

『いや、これは階級主義的なアイコンではなくて、２０年代のコミックカルチャーに影響されたコスチュームだからな、決してそういう……』

『こういう軍服みたいな制服って令和っていうより平成じゃないの、あ、２０年代ってまだ平成だったっけ？』

『２０年代は令和初期！　これ、基本だよ？　まあ、興味ないひとには解りにくいかもしれないのは重々承知だから基本的なことから説明するけどさ、まず１０年代後半からじわじわと SNS 等で注目を集めていた平成初期的なモチーフが二十年代後半に一気に台頭したんだよ。２０年代なってようやく従来のバイナリーな価値観が根本から見直される傾向がメインストリームになったからこそ、若者たちにセーラー服や学ランをはじめとした以前は階級定義に使われていたアイテムがポップに消費されていったという文脈があって、２０年代後半はそこからさらに 90 年代・ゼロ年代ブームも付随して巻き起こった平成レトロの時代だからね。つまりは、こういったモチーフはむしろ階級主義ではなく脱・階級主義のアイコンなのであって、このコスチュームの社会的意義はむしろ階級主義への克服にあるといえるから俺は別に……』

『おれ？』

『打ち間違えです』

この姿に、しかも２０年代の話が組み合わさると、ごく自然にあの三人のチャットで作った「キャラ」が出てしまった。いけない。今のわたしは「山田一番」でしかないのだ、佐々木五番もただの「佐々木五番」としてわたしと対面しているのだから。

『嘘つくなよ、あの分量一気にタイプしたくせに』

からからと佐々木五番の笑い声が不動のカイコ越しに聞こえる。カイコの姿を模した珍しいアバターは、やはりどこまでも不動である。その痛々しいまでのちぐはぐさに触れてよいのか、わたしは咄嗟に判断することができなかった。

『あはははは、ごめん、ごめん。あーっと……音声も文章もその、キャラクターに合わせてるんだよね？　いいよね、そういうこだわり、意味わかんないけど。山田一番って服とかもいっつも支給のやつばっかりだからさあ、そりゃあ支給の分だけで十分だけど、たまには気取った服も着たくなるもんだろ？　だのになんでだろうって思ってたけど、なるほど、全部アーカイブ視聴に回してるからか』

『わたしは佐々木五番みたいにスコアもそんなに高くないから、自分用の服を作れるほどポイント貯められないだけだよ』

『五十年前のアーカイブ権限とこの異様に凝ったモデリングよりは安い気がするけどねえ』

確かに倫理的問題のある表象へのアクセス権限にはかなり高い壁が設定されていた。継続的にある程度の量を視聴しようと思えば、服飾制作依頼よりも高くつくのは事実だった。

『いや、逆に、佐々木五番はこだわらなさすぎだよ。悪趣味なモチーフのわりにメイキングは写実的で緻密な所には並々ならぬこだわりを感じるけど、モーションが安すぎるというか、いや、逆にそこが良いってのもわかるけどね』

『……ふーん、悪趣味って、なんで？』

『なんでって……』

『何が、どんなふうに、悪趣味なのか教えてよ』

佐々木五番はもったいぶって消え入りそうな吐息を吹く。それは悪意のようでもあり、得難い信頼のようでもあった。

『遺伝子改変の象徴をわたしたちが使うのは、あまりにも自虐的では……』

７０年代において遺伝子は神聖でありタブーなのだ。

箱船の中では、20 年ほど前は盛んに行われていた遺伝子改変と資本主義が大人たちによって徹底的に悪として定義されていた。大人たちは基本回顧主義で昔のものばかりを愛したが、こればかりは別なようだった。

大人たちの学説では、環境破壊は遺伝子改変技術の普及がトリガーだと考えられている。さらに農薬や食料を安く作って高く売りたいという資本主義的欲望が遺伝子改変技術の普及させ、商売のために土壌は激変し原生の植物が生えなくなり、過剰な農薬散布によって花粉を運ぶ虫が死ぬ。生態系は基盤から揺るがされ、環境は壊滅していった。このおぞましい大罪の末に人類は罰せられているわけである。今や大人たちは遺伝子にメスをいれない形式の極めて原始的な「品種改良」にさえ否定的だ。

人類の利のためだけに「品種改良」された、いわば大人たちにとっての負の歴史の産物であるカイコは、反体制の表明と思われる危険性すらある。

しかも、箱船で生まれ育ったわたしたちが、大人たちの理想のために勉学を修め生活のために排泄するわたしたちが、「品種改良」の末に飛ぶことも食べることもできないのに次世代への継承のためだけに生かされる成体のカイコを自分の分身として使うのは、何故だかあまりにも侘しいことのように思えた。

『自虐的、ねえ……』
佐々木五番の声はどこか遠かった。わたしは、表情を介さない会話がここまで不透明でもどかしいことを初めて知った。
わたしだって佐々木五番に何か大切な想いがあることくらい、知っている。佐々木五番のふるまいは破滅的に見えていつもどうしようもないくらい寂しい。きっとそれは佐々木五番以上にわたしが良く知っていた。佐々木五番はいつも誰もいない暗い真空で燦々と燃え続けていた。その姿をわたしは誰よりも知っているのに、わたしは炎心にある孤独をまだ知らない。
『なんかさー、大人のそういうノリって良くわかんないっていうか、正直に言って無駄だろ。遺伝子を弄った豚や微生物で生きてるくせに、何をそんなに怖がってるんだか』
『それは、別でしょ。生き物じゃないよ……食肉と反応機は』
地中で隠遁生活をしながら贖罪につとめることにした人類だが、それなりに生きようとすると、やはりそれなりに生命工学を駆使しなければ立ち行かなかった。光も温度も空気も地上とはまるで違う地下空間でのヒトの生存およびに「純粋な生命」の遺伝子保存のためにはおびただしいエネルギーを要する。地上に設置した雨力発電機だけでは賄いきれずに、結果として消化機能が優良なこどもたちの糞尿を有機資源に加工し、またその加工の際のエネルギーを各所に回すことで豊かな生活が成り立っていた。
しかし、現段階の科学力と現実的なランニングコストを勘定すると加工の際にはどうしても半世紀前のように微生物を使わなければならない。しかし、人類の益だけのために遺伝子改変を行うのは大罪である。
大人たちは頭をなやませた後に苦しい折り合いをつけることにした。生体から遺伝子を切り抜いて培養するのではなく、塩基から何までゼロから実験室で生成し培養したものであればそれはもはや生物ではなく、人工物にすぎないのではないか。こうした発想で「反応機」は造られた。
なるほど確かに、生体由来の DNA を増やして切って貼らないのであれば遺伝子「改変」とは言えないであろう。
こうした理屈でいろいろな「人工物」が造られた。栄養摂取のための「食肉」、糞便を流す際に使われる油の「生産機」なんかもそうして造られていた。
『じゃあわたしたちは、何なんだよ』
カイコは答えられないわたしを真正面から見つめていた。
『父親も母親も知らない。人口子宮の中で適切な精子と卵子を組み合わせてできたわたしたちは何なんだろうね。誰から来て誰に帰るんだろう。わたしたちは生殖線も 10 歳のころにみんな切られてるだろう？　残すことができないわたしたちは何なんだろう』
『かぞくがいるでしょう。それにわたしたちだってかぞくを作れる。わたしたちは、かぞくから出てかぞくになるんだよ』

人口抑制と格差の是正のために、わたしたちは全て人口子宮機の中で未受精卵から満一歳まで育てられ、三歳になるまでは養育施設で４，５人につき何十人かの大人に育てられていた。養育施設で平等な教育と保護を受けた後は、一人ずつ監査を通過した最少共同体グループに送られ、一人につき４，５人の大人が公平な教育と愛情を注ぐ。これがいわゆる「かぞく」だった。かぞくの中では社会要員としての認識名である「氏名」ではなく個人的な認識名である「なまえ」で呼ばれることや、手をつなぐなどの肉体接触がコミュニケーションとして許された。こどもたち全員が満１５才となってからはこどもたちのパートナー申請や最少共同体申請が許されるようになったが、つい最近まではそういった暖かなものを与えてくれるのはかぞくだけだったのだ。

最少共同体はその名の通り、二人から 7 人で構成される最少の共同体だ。恋愛であったり友情であったり信頼であったり様々な形で大人たちは手を取り合っていた。わたしたちは誰しもそんな乾いていながらも懐かしく薄く輝く関係に憧れていた。虐げられることもなく各グループ内でたった一人の未熟者として包み込まれながら大事に育てられたわたしたちには、誰かと一緒になって４，５人のグループで共同生活を送りながら人口子宮機からやってきたこどもたちを養育するといった原風景が幸福としてインプットされていた。

『それに生殖腺手術はこどもが身体的・社会的負荷を負わないための保護措置かつ資源の奪い合いが起きないための人口抑制っていう共同体への貢献であってわたしたちの権利の簒奪ではないよ。わたしたちの精子と卵子は保存されて、何十年か後に社会人員数を増やそうってなったときのために解凍されるって習ったでしょう』

『わたしたちがまたかぞくに帰れる日なんか一体いつ来るんだろうね。二人っきりで真昼の草原でキスをする日の方が近いんじゃないか』

声だけでもニヤニヤ笑いながら言っているのが解る。こんな嫌な冗談で結構イイなと思ってる自分の浅はかさが見え隠れしていまうのが恥ずかしいし、そうさせる佐々木五番にむずがゆい苛立ちを覚えた。

『あー、もう！　自分から真面目な話ふったのにからかわないでくださいよ！』

『じゃあさ、真面目な話をすると、本当にわたしたちがそうなれる日って、とてつもなく遠いもののように感じない？　永遠に失われているような気さえするだろう』

冗談みたいな、全てを軽んじている声の中に萎びた苦痛があった気がして、わたしは仕方なく佐々木五番を許した。

『この世に永遠も絶対もなんかないよ』

真昼の草原というのは、夢物語・絵空事・ホラ噺の比喩のようなものとして使われるのが大半だ。しかし、わたしたちは夢と理想を実現するために生まれて生きているようなものなのだ。今が無理でもきっと五十年後には夢のように素晴らしい景色が広がっていたって、おかしくはない。五十年で世界がガラリと変わることを、わたしは知っている。

『そうだね。だってこの最後の砦だってボロボロで今にも崩れそうなんだから。人類に永遠と絶対はない』

『また、意地悪なことを……』
『だって本当のことなんだもん』
『はあ、そうですけど……でも、過去と比べて良くなったこともたくさんあるでしょう。有史以来人類を苦しめてきた階級主義的な苦しみからやっと解放されたわけですし』
『ええっ今もそんなに変わらないんじゃない？　結局わたしたちは学力とし尿の質で計られて大人たちは碌に体力もないし分解力もないのにわたしたちが生み出した資源を貪って、だのにわたしたちはお零れを貰うだけだろ、これって階級主義じゃないの？』
『考えが能力主義的かつ資本主義的すぎるよ。公平な社会では確かに優秀なひとは自分だけが多く払っているように感じるかもしれないけど、何も社会は優秀なひとだけで回っているわけじゃないんだ。本当の意味でたった一割の優秀な人材だけが生き残れるような社会になったら共同体の機能は壊滅します。社会の公平性は倫理と道徳の問題でもあるけど、本質的には実利の問題だってことくらい、歴史の勉強を少しやれば解ることでしょう？』
『教科書的だな、山田一番。歴史なんて真剣に学んで何になるの？　世の中の理不尽でどうしようもないことにばかり解像度が高くなったって、浅慮に敏感になって怒ることが増えるだけだよ。せいぜい真剣で正直なことを無神経に面白がるのが一等幸せな生き方だろ』
『……佐々木五番は歴史の勉強は嫌いなの？』
『わたしは嘘だから好きなんだ。自分には関係がない夢のおとぎ話だから楽しく消費できて好き。でもこういうのすら「好き」にいれたら良くないよね？　なんとなくだけど』
『わたしは、理由があることがわかるから歴史が好きなんだ。歴史を学べば、納得も理解もできないことにも、どんなに理不尽な理由だろうが、きっと理由があるって思えるから』
『でも、理由を知ったら逆に悩むことが多くなるよ』
『怒るより悩むほうがわたしには向いてる』
『ふーん、わたしは結局自分を忘れるために歴史を使ったけど、山田一番は自分に寄り添うために歴史を使ったんだね』
佐々木五番は何の気も無しに『きっと、わたしは山田一番のそういうところも好きなんだろうな』と独り言ちる。
『は』
『脱線しちゃったけど、元々そういう話でしょ』
わたしたち、二人っきりの恋人になるんだよ、佐々木五番はまるで半世紀前から決まりきったことであるかのように言い切った。
『わたしでもさ、一応リアルの姿や立場を知ってからひとを好きになることに罪悪感があったんだよ。オンラインで知り合うことがフツウだからっていうのもあるけど……だって、まるで人の容姿や社会的地位を価値つけて打算的に身勝手な感情をぶつけてるみたいで、いけないことだって思ったんだ。いや、そういう「いけないことしてる」って罪悪感でさらに君への好意が焚きつけられてる自覚があったから、罪悪感があったんだ」
『そういう冗談は……やめてよ、怒るよ』

最期の威厳で築き上げたわたしの頑なさを佐々木五番はあっさりと無視して続ける。
『でも、打算でも純愛でも、山田一番のこと好きだな。こういうのって、山田一番はいけないと思う？』
佐々木五番はひどいひとだ。わたしが自分に逆らえないのを知って残酷な甘え方をしてくるのだ。そうすれば、わたしが飛び上がって歓喜して佐々木五番に尽くすのを知っているから。
『わたしがなんて答えるか解ってていってるでしょう……』
私が不自然な動作で顔を背けると、佐々木五番は柔くくすぐるように笑った。らしくない。佐々木五番はらしくない動作も様になるのはとてもいけないと思う。
『はっきり言いなよ』
佐々木五番はガハハとやっとらしい笑い声をあげながらありがとうと上機嫌に口ずさむ。わたしは、まだ、なにも言っていない。
心臓が痛い。わたしは佐々木五番といるときは、二人になれる。溺れてしまいそうな恐ろしい幸福だった。
『ほら、誓ってよ』
佐々木五番がそっとパートナー申請ウィンドウを差し出す。
とうに一時間は過ぎていた。
自然と言葉が口から零れる。
『ねえ、会いたい』
『うん、じゃあ、今度はいつチャットする？　明日にでも……』
ルームの設定をいじる佐々木五番をよそにわたしの言葉はとめどなく流れていく。
『佐々木五番の、目を見て、手を握っりながら話したいことがたくさんあるんだ』
佐々木五番は完全に沈黙した後、一等優しくて明るい声で『ああ、わたしも本当はそうしたかった』と歌い上げるように答えた。

◇

「光が……眩しい……」
ざあざあと換気口から送られる空気が草原を撫でるように滑空する。草原が横たわったり跳ね返ったりするたびにチカチカと幾多もの光の粒が直接眼球を刺した。
「太陽を失っても、大地を失っても、し尿資源を浪費しながら50年前の箱庭を創ってしまうのって、人間のエゴなのかな、それとも傲慢？」
佐々木五番がニッコリと笑いながら「風」にささやいた。私は佐々木五番が何故この実験プラントに入るときコンタクトをしまわせた上に、ガイドゴーグルまで断りをいれたのかを察してため息をつく。ここにはカメラしかないからって好き勝手に言っても良いと思っているのだ。1か月ほどの濃密な関わり合いのせいで、もはや解らない方が良い部分まで把

握できるようになってしまった。けれど佐々木五番は私の様子を見ても「太陽」に目を細めているようにしか見えないらしくご機嫌なステップで草原をたたいた。
「きっと希望って言うんでしょう。ほら、こんなに美しくて暖かいんですよ」
わたしたちは新設の実験施設に来ていた。実験だけでなく、大人たちの郷愁を満たす役割も前提としているこの施設は、予約をすれば一般人でも入場可能らしかった。佐々木五番は全ポイントを投げ打って貸し切り状態にしたらしい。わたしは今でもたまに佐々木五番の本質は切実なのか、それとも単に酔狂なのか判別の付かないときがある。そう、まさしく今日のような日は特に。
「だってさ、これ全部『土』だぜ。貴重な有機資源をこんなにたくさん敷きつめてさぁ。それに照明だってこんなに明るくする必要ある？　昼だってこんなに明るくないのに」
「地上では普通これくらいの明るさだったんでしょう」
「希望って懐古趣味？」
鋭い反論にわたしは苦し紛れの防御をする。
「うーん、未来への嘱託では……？」
「未来ってわたしたち？」
「大人たちにとってはそうでしょう」
「わたしたちにとっては？」
ざあとまた「風」が吹く。金属製のグロテスクな換気口はおどろくほどに静かだった。夢のように美しい草原と佐々木五番の方がよほど雄弁である。
「ねぇ、山田一番が教えてよ」
ぎゅっと手を握られる。気づいたらカメラの死角に来ていた。新設の実験施設である故か、他の施設のように人間の問題行動を監視するための仕組みは皆無に等しかった。
「今どき死角があるなんてありえないよなあ」
私は自分の手汗が滲むまできつく佐々木五番の手を右手で絞った。
「実験施設でこんなことするこどもなんかいないから？」
意趣返しでそっとささやくと、佐々木五番はくすぐったそうに笑った。
「でも、50 年前の恋人たちは、こうやって手をつないで『植物園』とかを歩いたりしたんでしょ、ほら、50 年前を取り戻すのが私たちの役目なんだからさ……」
佐々木五番がからかう笑うたびにわたしはままならなくなる。どこかで佐々木五番とわたしが泣いていることに気づかされるからだ。わたしは今になって、一目見て佐々木五番がわたしの代わりに泣いてくれていると思えたから、同じ傷を持ったこどもだと信じることができたから、たまらなくなることに気づく。二人はどこまでも同じ道を歩んでくれると信じ切っていた。けれど風に長い髪をたなびかせる佐々木五番は、くだらない思いつきでわたしの手の及ばない場所へと行ってしまいそうで、わたしは無責任なまま焦燥に駆られた。
「ねえ、なまえ、なまえ教えてよ」
気が付いたときには必要以上に大きな声で問うていた。まるで、みっともなく縋りついて

いるようで、わたしは必死に佐々木五番がいつものように意地悪く笑いとばしてくれることを願った。
「覚えてて、私のなまえはノアだよ」
　佐々木五番はわたしをまっすぐに見ていた。そこにはためらいがなかった。
「ノア…？」
「うん、ノアだよ、あのノア。悪趣味でしょ？」
「優しいなまえだと、思いました」
　わたしは自分の高揚を隠すように誰も救われないだろう定型文を慌てて言い募った。
「優しいって、残酷よりももっと酷いってことだろ。悪趣味と同じだよ」
「私は、ノアが好きだから…」
　大抵の場合は、本当のことを言いさえすればノアの溜飲はいとも容易く下がる。せわしない付き合いの末に得た万能のテクノロジーだった。しかし、この定理において最も重要で確かな部分は「大抵の場合は」であるということを忘れてはならない。
「ふーん、そう。ねぇ、私が好きな人のなまえは何なの？」
「耀」と緊張ですぼむ唇の先でなんとか発音する。
「あきら？　結晶のほうの？」
「耀くのほうの耀」
「そっか、わたしたち二人ともやさしいなまえなんだね 」
　ノアがとろけるように笑うので、きっとそれが正解なのだと思えた。今が幸福だと断じれた。
　「耀が、答えてよ」
　唐突にノアが要求する。今までの経験からしてこれは確実に悪い兆候であり、二人にとって絶対に必要な過程でもあった。
　「私が、耀が言いたいこと全部言ってあげるから、耀は私が知りたいこと全部答えて」
　「知りたいこと？…ノアが知らないことなんて、わたしだってきっと解りませんよ」
　「そうかな、例えば五十年後のこととか、私よりずっと耀のほうが知ってるよ　私は５秒後何が起こるかさえも本当はわからないんだ」
　「もうさ、何でも知ってふりは、もう、疲れてできないんだ」ノアの声は少しずつ凍っていき、凍えるように震えていった。
　「ねぇ、耀、お前が答えてくれよ。ねえ、大人たちはいつまで優しい嘘をついてくれるのかな？」
　わたしは息を飲む。間違えないように、いや、それが間違いだと思われないように、わたしはゆったりとノアを詰った。
　「ノア、ねえノア、ひどいことなんか何もないんだよ。ここには……何もない。ただ時間が過ぎ去っていってしまうというだけだから、今はただ地球環境改善のために勉強して、良質な排泄物を提供して……とにかくそういう当たり前の積み重ねをしていくしかない

んだ。いくら将来が不安でも、そうやって……」
「そうやって信じてきたんでしょうって？　冗談じゃない！」
ノアが声を荒げるのを、わたしは初めて聞いた。ああ、今からでも、嫌なことは全て雨に押し流されてしまえばいいのに。ノアの叫び声はまるでもうとっくの昔にひしゃげたロボットが無理やり動き続けているようだった。
「まァ……そうだね、酷いことなんか何にもないから、何にもないからこんなにも悲しいんだ！　仕方なかったなんて、もっと他にやりようがなかっただなんて、思いたくないよ、悲しいじゃないか……どうしたってわたしたちには見捨てられる道しかなかったって認めなきゃならないのか」
ノア、待って、あなたは、わたしとずっと一緒にいるだけじゃ、やっぱりダメなのかな。どうしたって、一緒に何も知らないふるをしたまま朽ちてくれないのだろうか。ノア、どうしてあなただけがそんなに冷たい所で一人でいるの。どうしてわたしの居ない所にずっといるの。ノア、どうしてもここに来てはくれないの？
「なあ、スコアが低いとそんなことも解らないのか？　……あはは、わたしたちは、あの首がないブクブク膨れた豚と同じなんだよ。反応層にうじゃうじゃ湧いてる微生物どもと同じだ。なんでみんな怒鳴りもしないんだ？　私はずっと泣き叫びたくてたまらないのに 」
「ごめんなさい、ノア、違うんだよ……」
「何も知らなかったわたしたちにあんなに暖かいものを与えたくせに！　裏切りやがったんだ大人は！　私と一緒に死のうとも一緒に生きようともしてくれなかった。一人でこんなに冷たい地の中を歩けっていうのかよ、なあ、耀、寂しいよ、寂しいのに、誰もが憎いんだ。平気な顔で生きれるやつらが妬ましい。まるで全てが悪意みたいに見えてきて、嫌だよ……自分も、お前も、みんな嫌だよ！」
大人たちがこっそり弱って死んでいくのに、わたしたちはただ健やかに成長していくこと。わたしたち２０５４年生まれの１５２人のほかにこどもはいなかったこと。
きっとそれは、もう地中にだって「純粋な」人類が生きれる場所なんてないことなんじゃないかってみんな気づいている。
きっと、純粋な子どもはすぐに死んだんでしょう。大人たちもはじめはもっとたくさんいただろうにどんどん死んでいったんでしょう。
もう、種を保存する術がなくなって、いよいよ大人たちは頭を悩ませた。
機械を使うにしても、何十年も正常に稼働し、そのうえ種の保存と人類の存続といった複雑なタスクをこなしていく AI を余裕がない状態でできるのだろうか、できたとして何年後だろうか。
そうしてわたしたちは生まれて、そうして育てられた。
地球への奉仕のための人工物が、１５２機。
「こどもたちを結託させないためにコンタクト・フォンでコミュニケーションをとるように誘導して、コンタクト・フォンを通して会話と行動を監視するだけでも気味が悪いった

らありゃしないのに、どんどん知恵をつけて手に負えなくなるわたしたちを監視するために『し尿バイト』なんてでっち上げて……泣き喚いてやりたいのはこっちなのに、どうして裏切った大人たちが怯えるんだよ！」
　ノアは身を隠すように膝を抱える。やっぱりノアの方がしってるじゃないか、わたしは初めて全部嘘だって知ったよ。今まで疑おうとも思わなかったから、無神経でいることに夢中だったから。
　「なあ、なんで企業競争がないのに、『人工物』には幹細胞を作れないようにプロテクトが仕組まれてるんだ？」
　「そんな、まさか……」
　やめてよ。それ以上、傷つこうとしないでよ。
　「あいつら、ヒトモドキが繁栄するくらいなら、何もかも共倒れした方がマシだって思ってやがるんだ。わたしたちは、次世代なんか残せないよ。大人たちは思い出を裏切った。全部演技だったんだ。もし、わたしたちが『純粋な』人類を残せるくらい成功したときに、わたしたちが人類に『愛情』や『教育』を与えられように、プログラミングしてただけなんだよ……」
　佐々木五番は、もう、何も視たくないとでも言うように膝に頭を俯けてじっと固まる。わたしたちは、どこにも帰れないところまで来てしまっていた。
「ねえ、命一杯に速く走りすぎたのかな、どうして誰も崖に堕ちるまで教えてくれなかったんだろう。自分自身ですら教えてくれない怖いものが世の中に溢れていて、触れるまでそれに気づけないだなんて、悲しいね。傷つくために生まれてきたみたいだから」
　うずくまるノアにそっと投げかける。きっと何の慰めにだってならなくても、弱いわたしは沈黙に耐えられなかった。
「あああ！　ああ、もう、みんな大嫌いだ！　必死にまるでどこにも傷がないみたいにふるまっていて大嫌いだ！　うるさいなぁ、過去のことも未来のことも考えたいわけないだろ！　全てが私を軽んじているじゃないか。私が産まれなくちゃいけなかった理由も私がこれから生きていかなきゃいけない理由も全てが私を軽んじた上で成り立ってるっていうのに！　ああ、もう何もかもが嫌なんだよ。今あることだけで手一杯なんだ。自分で考えて行動するなんて、嫌だよ、できないよ。だって正しいことなんて悪いことなんて何にもないじゃないか。ちゃんとやれって言うなら誰かちゃんと私を叱ってよ！　どうすれば良いのか見捨てないで教えてよ！　どうしてみんな傷がないふりをするの？　なあ、どうして私だけ弱くて反社会的で悪質なものとして扱うんだ？　私は正気なだけだ！」
　キッとわたしを睨みつけたかと思えば、ロウソクの火がふっと消えるようにノアの表情からは激情が打ち消され、白紙に一気に悲しみの色がぶちまけられる。
「はっ、まあ、そうだよな、事実そうだもんな。お前、私がし尿バイトしてるんじゃないかって思ってあのとき止めたんだろ？　そんなことさ、解ってるよとっくに、でも、お前だけだったんだよ。誰かがいつ話しかけても良いようにずっとコンタクトなんか着けずに歩い

てた。お前だけだったよ。お前だけだったんだよ。普通に話しかけてきてくれたのは、きちんと約束を守ってくれたのは、私の癇癪交じりのとりとめのない話を最後まで聞いてくれたのは、お前だけだったんだよ」
「え、そんな、そんなことなんかで」
「ほんとにさあ……馬鹿みたいだよ。その人が何をしてくれたのかよりも、自分にとって大切なものを始めて与えてくれた人が誰なのかっていうことの方が重いみたいだ。結局、感情で動いてるんだぜ、都合の良い道具のくせに」
　ノアの皮肉はいつも寂しそうだ。いつも誰かに、そんなことないよって言ってもらうのを待っているから。
　本当はね、わたしずっと知っていたんです。あなたがずっと泣いてるのも、こんなにも泣きはらしているのに自分自身にさえ見向きもされてないのも、全部きっとわかっていたんです。このひとだったら、こんなひとならわたしみたいな真剣に生きれない人間とも一緒に生きて果ててくれるんじゃないかだなんて思っていたんですよ。
　今更あなたのこと見くびっていたのを知っても、わたしは、私は、決してもう一人になれないことを、あなたはまだ知らないのだろうか。初めて私のどっちつかずの話を辛抱強く聞いて、きれいごとしか堂々と言えない弱さをやさしさだと言ってくれたのはあなたなのに、私の手をとって昼の草原に連れ出したのはあなたなのに。
「だから、私はお前のこと好きなのにさあ、お前はどうせ裏切るんだろ、私がさわる度にビクビクしてさあ、もういいよ、疲れたから 」
わたしは怒りのままに強くノアの腕を引いく。ノアはいとも簡単にわたしの方によろけた。
「誓え！」
　殆ど無意識でそう叫んだ。デコルテの内側がギリギリと痛む。ノアはただ茫然としていた。
「私と生きて私と死ぬことを誓って！　苦しくても惨めでも私の隣であしたを待つことを誓って！」
「いやだよ……何言ってんだお前……」
「私は誓うよ。いくら解り会えなくても分かち合えなくても朝はあなたと迎えたい。苦しみが続く限りあなたの側を離れない」
「やめてくれ、もうやめてくれよ、そういうの……期待されたって私は何もできないんだ。それくらい察してくれよ私はお前が思うようには絶対になれないんだ。きっと私は何度もお前を裏切って哀しい目に遭わせるよ。もう、本当に、いいんだよ……」
「都合の良いひとが欲しくて言ってるんじゃないんです。ただ、その、あなたのことが、ノアのことが好きだから…」
　格好の付かない私の告白を、ノアはとうとういつものようにクスリと笑って、骨と骨をぶつけるように抱き着いた。私もそっと手を、ノアの背に這わせる。
　二人で抱き締め会ったところで、手を握り締めたところで、きっとなにもいい方向に転びやしないことなんかお互い解りきっていた。

大人は死んでいく、わたしたちは大人の理想に殺されていく、遺伝子の期限が迫っていく、地球がより取り返しのつかないことになっていく、全てが台無しになっていく。

けれど、こうして二人でいれる間だけはずっと眩しい気持ちでいられることだって解りきっているのだ。二人で手を繋ぐときだけは、世界は永遠になる。五十年後のことも五十年前のことも全てが無に帰すフィールドでポツンと並んで座って、たまに目を合わせてはにかんで笑いあうことが煌めく夢のように素晴らしかった。私はノアを手放せなかったし、ノアは私を手放せなかった。

ノアがおもむろに離れて歩き出す。わたしは無言で背をゆっくりと追った。風の音が響く。何も知らないまま運命に潰されて箱船に乗り込む五十年前の子どもたちよ、わたしたちはあなたたちの未来への誠意を信じてフラスコ製のいのちを使おう。それが、暖かい思い出への弔いだと信じて。

何も持たされずに大きな使命に踏み潰される五十年後の子どもたちよ、わたしたちはあなたたちに愛を与えることはできやしないけれど、いつかあなたたちが一瞬の永遠をてに入れられるように十数年の嘘を守ろう、きっとそれがわたしたちにできる最大の努力と祝福を信じて。

前を行く人は、風に拐われそうな小さな声で私の名を呼び振り替える。

それが、あまりにも目映くて暖かくて痛くて懐かしくて、私はなんとなく明日も生きようと思うのだ。

わたしたちは幸福なこどもたちだった。

輝く草原の上で二人はキスをする。

夢は実現しないし、未来には到底かなわない。

わたしたちはただシンプルに半世紀の苦しみを誓ったのだ。

苦しい今日を愛おしいひとの存在でごまかしながら何千回も重ねていくと誓ったのだ。

本当の希望は生臭くて、べとついている。

二人は、少し拍子抜けして、漏れ出すように笑い合った。